

「み言葉はわが灯」
詩編 119：105～112
木村一充牧師

新しい年、2026年を迎えました。まずは、新年のご挨拶を申し上げます。皆さま、新年明けましておめでとうございます。今年の1年が、神さまの恵みと祝福のもとで感謝と喜びに満ちた1年でありますようにお祈りいたします。1月1日の元旦礼拝には39名の方が礼拝に出席され、一步先に新年のご挨拶をしました。今年は午年でありますが、午年は飛躍の年であると言われます。今年の1年がお一人お一人にとって実り豊かな、飛躍の年となりますように心からお祈りいたします。

その新年礼拝の朝に与えられた聖書は、詩編 119 編 105 節以下であります。ここには「あなたのみ言葉は、わたしの道の光、わたしの歩みを照らす灯」という大変よく知られた言葉が書かれています。本朝はこの個所からみ言葉を分かち合いたいと思います。三ヶ日のあいだに東大大学院の教授である市川 裕ひろしという人が書いた新書本「ユダヤ人とユダヤ教」という本を読み返してみました。これは、とても優れたユダヤ教の研究書であります。この本の中で、著者は冒頭に「ユダヤ人とはだれか」という問い合わせを投げかけています。中世においては、ユダヤ人とは「ユダヤ教に改宗した人、またはユダヤ人の母親から生まれた子」と定義されていました。父親ではない、「母親から生まれた子」とされたのが、いかにもユダヤ教らしいですね。DNA鑑定などなかった時代に、この母から生まれたという事実こそ、確かなユダヤ人血筋の証拠となつたということでしょう。現代においてもこの定義は生きていますが、1950年代にイスラエル首相となったベンギリオンの政権下で、何をもって「ユダヤ人」とみなすかの基準が決定されました。それは次の通りです。「ユダヤ人とは、ラビの権威に服従し、ユダヤ教の聖典であるタルムードの教えのもとに生きる人のことである」タルムードとは、ユダヤの律法（トーラー）を学び、その研究成果をまとめた解説書のことです。その教えのもとに生きる人のことをベンギリオン政府は、正統派の「ユダヤ人」であると定めました。平たく言えば、ユダヤ人とは律法の教えに従って生きる人のことです。

この本を読んで思わされたことは、私どもキリスト教信仰は、ユダヤ教のトーラーに対する学びの深さ、また日常生活の中にトーラーを適用していく厳格さという点において、とてもかなわないということでした。有名な申命記の6章4節以下に「聞け、イスラエルよ」で始まる、イエスご自身も福音書の中で語られた有名な言葉があります。「あなたは、心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、主なるあなたの神を愛しなさい」という教えです。著者の市川氏はヘブライ大学に留学し、そこで律法の解説書であるタルムード文学を学んだ人ですが、この申命記の言葉を取り上げて、この神への愛の教えはまことに厳しい教えだと、述べています。「力を尽くして」とは「全力で」という意味ですが、それは具体的には財力のことを指し、全財産をかけて神を愛せよ、という意味になるといいます。さらに、「魂を尽くし」と書かれる「魂」とは「命」を意味し、この言葉は「命がけで神を愛せ」という意味だといいます。さらに「心を尽くし」とは、「一切の疑いを持つことなく、たとえ惡が心を占めた時でも神を愛せ」という意味になるといいます。この教えを厳格に守るために、ラビたちは実際に、中世の托鉢修道士のような貧しい生活を選んだのかというとそうではないといいます。全財産を放棄してしまっては、ほかの信仰のかけらもない人のいうことに従わなければならなくなる。それでは、神の教えに生きることができない。だから全財産の二割以上は放棄してはならないと申し合わせた。きわめて現実的な神への従い方です。全財産をささげることが、決してすぐれた神への従い方ではないと、ユダヤの教師たちは伝えてきたのです。まことに分別のある対応であるといえるでしょう。

元旦の礼拝で、私は2026年は教会に若い人たち、子どもたちを呼び込むために何らかの機会や場所を提供する動きを起こしたいと申し上げました。たとえ、それがすぐに結果につながらなくても、コツコツと種まきをして、子どもたちが私たちの教会に気軽に足を踏み入れることができるようなきっかけづくりをしたい。そのためのアクションを起こす年にしたいと、申しました。み言葉に生きるとは、行動によって神への思いを示すということです。十戒に「安息日を覚えて、これを聖別せよ」という戒めがあります。この教えは何のためにあるのか。この日には一切の仕事をするなど定められているが、その目的は何のためか。それは、この日をみ言葉に触れて神と交わり神を賛美し、おいしい食事や家族との団らんを通して生きる喜びを増すためである、と市川氏は

いいます。そのとおりだと思うのです。

私は学生時代に板橋区に住み、アパートから一番近かった教会を訪ねて礼拝に通い、そこで信仰を与えられてバプテスマを受けました。それが常盤台バプテスト教会でした。バプテスマを受けてから、ごく自然に教会学校の分級や祈祷会、さらには青年たちの集まりに参加して、聖書を学ぶ機会がありました。たいへん申し訳ないのですが、そのような場で聞いた話を、私はほとんど覚えていません。それは、私の信仰がまだまだ薄っぺらな信仰であったからだと正直に告白しなければなりません。しかし、そんな私が、決して忘れることなく、強烈に覚えていることがあります。それは、毎週の日曜礼拝で会堂の正面に向かって一番前の席で、毎週ざぶとんに正座して礼拝に出席し、説教を聞いていらしたおばあちゃんの姿でした。確か谷本さんと言われましたが、彼女は礼拝用に自分専用のざぶとんを持ってきて、礼拝の開始前にベンチにそれを敷いてそこに座っていました。ちょうど、ボウリングの愛好家がマイボールを持ってボウリング場に行くように、彼女はマイざぶとんを持参して、一度も休むことなく正座して日曜礼拝に出席されました。それは、あのころの常盤台教会の主日礼拝における一つの景色を作っていたとさえ、私には思われました。このおばあちゃんと、私は一言も言葉を交わしたことありませんでした。しかし、彼女の姿を見るだけで、私は他のどの学びよりもはるかに強烈に「安息日を覚えて、これを聖別せよ」と命じる十戒の教えを学んだように思うのです。聖書の民であるユダヤ人は、そのようにして律法を守り、これに従い、見える行動を通して神の言葉によって生きるということを実践しました。

旧約の預言書であるエレミヤ書15章16節に、次のみ言葉があります。「わたしはみ言葉を与えられて、それを食べました。み言葉はわたしに喜びとなり、心の楽しみとなりました」神の言葉が、エレミヤが言うように、私たちの喜びとなり、心の楽しみとなるならば、私たちはみ言葉によって確実に養われるに違いありません。お正月に次女の家族がやってきて、初孫とともに楽しい時を過ごしました。よくミルクを飲むのです。ミルクを飲み終わると、もっと飲みたいと言わんばかりに泣き出すほどです。ミルクが体の成長に大いに力を発揮しています。しかし、人間は、体の成長と同じくらい心が成長しなければなりません。人生の歩みは決して平坦ではありません。悲しみの時があり、試練の時があり、病の時があります。そのような苦難の時に、私たちはいったい何を支えとして歩めばよいのか。その時に私たちを支えてくれるもの、それが神の言葉ではないでしょうか。孤独な預言者と呼ばれたエレミヤの苦難な預言者としての活動を支えたものも神の言葉でした。エレミヤは、み言葉を与えられてそれを食べました。すると、み言葉がエレミヤの喜びとなり、心の楽しみとなったというのです。そのようなみ言葉の味わい方を私たちも倣いたいのです。

今週の火曜日には、かつて私たちの教会の役員として教会の働きを担ってくださったSさんの告別式がおこなわれます。お正月に家族が一堂に集い、いっしょに食事をして、ゲームなどを楽しまれて皆が解散したあと、急に具合が悪くなってそのまま天に召されたといいます。前々から、大きな病気とその手術を経験されてきましたが、心臓の動脈乖離が直接の原因だといいます。元旦礼拝で、今年の年男として、報告のなかでご紹介した、まさにその日の夜の出来事でした。今、告別のことばを考えていますが、ひとつ申し上げたい。それは、このことの中にも神さまの深い憐れみと測り知れないご計画があったのではないかということです。年の初めに、家族のみんなが集まり、楽しい時、幸せな時間を過ごされた。そして、神さまの御手のうちに引き上げられた。それは、ある意味で見事な最期だったのでないでしょうか。お元気であれば、昨日84歳になられたお方でした。あなたも、そんな最期だといいわね、と妻から言われたほどでした。いつ、神さまから召されるか、それもまた主の御手のうちの事柄です。しかし、大切なことはその時にあっても、平安でいることができるということです。それが私どもの特権ではないでしょうか。

私たちは、神の言葉によって支えられ、神の言葉によって生きるもののです。どのような人生を歩もうと、「あなたのみ言葉は、わたしの道の光。わたしの歩みを照らす灯」という今日の詩編の言葉をたよりに、先の見えない今の時代において、途方に暮れて立ち尽くすことなく、主の光に導かれて歩みたいと思うのであります。

お祈りいたします。